

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

スペイン植民地前期におけるミチョアカンのタラスコ先住民と二重経済：  
先住民の人頭税に見られるスペイン重商主義の機制

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2019-03-28 キーワード (Ja): タラスコ, 人頭税の金納化, 植民地経済の二重構造, レパルティミエント, スペイン重商主義 キーワード (En): 作成者: 林, 美智代 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00007856">https://doi.org/10.18956/00007856</a>

## スペイン植民地前期におけるミチョアカンのタラスコ先住民と二重経済 — 先住民の人頭税に見られるスペイン重商主義の機制 —

林 美智代

### 要 旨

エルナン・コルテスによるメキシコの征服は、アステカの征服だけではなく、アステカと敵対していた他の先住民社会にも及んだ。メキシコ北西部のミチョアカンを支配領域としていたタラスコ人の先住民社会は、その一例である。植民地支配開始とともに、スペインの度量衡と貨幣経済が導入された。先スペイン期の貢納制が漸進的に解体され、征服から半世紀を経て、人頭税の金納化への移行が実施された。征服から17世紀前半に至る時期におけるタラスコ先住民社会をてがかりに、税の金納化に込められたスペイン重商主義の機制について考察する。その狙いとは、先住民を貨幣経済に統合することではなく、レパルティミエント（有償の強制労働徴発制度）と税の金納化を連動させ、植民地の経済活動の中で最も利潤が高い鉱業へと彼らの労働力を集中させることだった。その果実はスペインやフィリピンに流出し、ひいては世界経済を潤すことになった。

キーワード：タラスコ、人頭税の金納化、植民地経済の二重構造、レパルティミエント、  
スペイン重商主義

### はじめに

スペインはメキシコを征服後、統治体制をできるだけ速やかに安定させ、征服者・入植者の生活を確保し、本国の利益に資するよう彼らの経済活動を支援することを急務とした。そのためには、先住民の貢納と賦役は必要不可欠な資源だった。スペインは先住民を「自由な臣下」と規定して彼らに対する課税を正当化した。先住民の資源が植民地の社会と経済の基盤形成に投下され発展に貢献したことは、メキシコ植民地史の通説となっている。

この意味において、植民地期の先住民の税と労働に関する研究は古典的である。この分野の嚆矢であり、通説の定着に寄与した Miranda [1954] は、先住民の税に関する研究を行っている。Miranda は、メキシコ各地の先住民村の豊富な事例を挙げて、先スペイン期の貢納制から先住民の人口にもとづく人頭税への移行を具体的に示しながら、スペインの征服に起因する社会の激変のために、先住民が新しい労働形態と価値観への適応に苦慮したことを実証している。

一方、Semo〔1973〕は植民地期のメキシコ経済史の視点から、先住民の生産物と労働の余剰を基礎に植民地で生産された財からあがる王室収入の多くがスペインへ運ばれ、ヨーロッパ資本主義経済の形成に貢献したことを述べている。

メキシコにおけるスペインの統治と植民地経済の一般的特徴を、Mirandaは歴史家として実証し、Semoは経済史家として理論化した。しかし、両氏の研究において、貢納制から人頭税への移行に見られる地域の特殊性、および、先住民が人頭税の金納化に対して容易に対応できるほど貨幣経済が彼らの間に浸透していたのかどうか、彼らを貨幣経済に統合することが金納化政策の狙いであったのかについては、明らかにされていない。ミチョアカンに限っても、そのような問題意識に関わる研究は見あたらない。本稿では、征服後から17世紀前半に至るミチョアカンのタラスコ王国をとりあげ、税制度移行の具体的プロセス、スペインの貨幣経済の導入と商業資本の浸透、および人頭税金納化の実態と意味を考察し、金納化政策に内在されるスペイン重商主義の機制を明らかにする。ミチョアカンはメキシコ中西部に位置し、先スペイン期からその地域を支配領域にしていたタラスコは、アステカと競合する社会を形成していた人々である。

## 1. 征服と略奪

タラスコ王国の起源は、12世紀末から13世紀初頭、ミチョアカンに進出した狩猟民ウアクセチャの民族移動にまで遡る。その地に侵入し、すでにそこに定住していた農民や漁民と混血して、タラスコ王国を築いた。タラスコはアステカと敵対し、先スペイン期において、アステカの支配下に入ったことはなかった。タラスコもアステカと同じく、カソンシ（君主）を頂点に貴族と平民に二分され、平民から貢納を受け取る祭政一致の専制貢納制社会を形成していた。金・銀の装飾品を威信財とするカソンシに象徴される貴族は王族、神官、役人、戦士からなり、平民は、農業・狩猟・漁労、および羽毛細工、土器や金属製装身具や道具類の製作、貴金属の採掘に従事する農耕漁労民や職人であり、社会分業が行われていた。市場では、カカオや小綿布、硬貨大の銅斧が代替貨幣として用いられていた。1521年のアステカ崩壊後、スペイン支配下に入った先住民社会である。

ミチョアカンの中心地域



征服段階から、スペイン人とタラスコの経済的価値観が乖離していたことは、社会発展の段階から当然のことである。スペインは政治的には晩期封建制、経済的には貴金属と商業価値の高い商品作物を求める重商主義段階にあった。征服を契機に、タラスコ社会からどれほどの財宝が掠奪されたか。征服者の行動に、両社会の価値観の乖離を認めることができる。

すでにコルテスがテノチティトランに到着する以前に、タラスコのカソンシであるスアングアは、アステカのモクテスマ2世から和睦とスペイン人撃退のための援軍の派遣を要請されていた。しかし、スアングアは、この和睦の申し出をこれまでのアステカの奸計とかわらないものと判断し、断った。1521年8月にアステカがコルテス軍に惨敗すると、翌月9月には、スアングアを継いだタンガソアンは、コルテスのもとへ使者を派遣して恭順の意を伝えた。その時、スペイン国王への献上品がコルテスに渡された。コルテスはその献上品を王室財務官フリアン・アルデレテに引き渡した。それらの献上品はタラスコ王室の一級品であり、祭祀用の神聖な品々が含まれていた。

- 金箔の銀製楯（握り手なし） 2帖（7マルク7オンス）
- 金箔の銀製腕輪 2個（2マルク6オンス）
- 金箔の銀製耳輪 14組（6オンス）
- 銀製の楯（握り手あり） 18帖（47マルク6オンス）
- 銀製の腕輪 20個（24マルク2オンス）
- 銀製の小環付きの紐 1本（2オンス）

（1マルク=230g、1オンス=28.76g）

- 金箔の銅製小環付き頭飾り紐 1本
- 鹿革の靴3足、多色の羽毛で縁取りされた革製の首飾り3組、革製の腕当て20個、

白色羽毛の羽飾り12頭と青色羽毛の羽飾り 6 頭

-その他

ヒカラ (カボチャをくりぬいた容器)、粗綿布

[Warren, pp.377-378]

タラスコの使者は、コルテスからアステカの惨敗とスペイン軍の武力を見せつけられた後、ミチョアカンへ帰還した。コルテスはタラスコと2度接触したあと、1523年、盟友クリストバル・デ・オリをミチョアカンへ派遣した。タンガソアンは武力抵抗を諦め、タラスコ王国はスペイン支配下に入った。征服者オリがメキシコ市へ帰還するときにミチョアカンから持ち帰った戦利品は、メキシコ市で競売にかけられた。銀で総額約9,601ペソ (=264kg <1ペソ=銀27.5g>) にのぼった。そのうち、スペイン王室はキント税 (20%) に相当する1,920ペソ (=52.8kg) を、その残りの20%にあたる1,536ペソ (=42.4kg) をコルテスが取った。その後、征服軍の総大将オリと、コルテスがミチョアカンの太平洋岸に位置するサカトゥラに派遣していた部隊長 J.ロドリゲス・デ・ビジャフェルテには、それぞれ160ペソ (4.4kg) が分け与えられた。征服部隊の職位にもとづき、80ペソ (部隊長、メキシコ市の役人など10人)、60ペソ (騎馬兵27人)、30ペソ (弓手20人) 20ペソ (歩兵113人) が分配された。[ibid., pp.379-385]

その後も、コルテスや彼の行動を監視・抑止するために派遣された王室官吏、およびミチョアカン征服に関与した通訳は、略奪を行った。コルテスがホンジュラス遠征のためにメキシコを留守にしている間、本国から派遣された第一次高等法院長官ヌニョ・デ・グスマンと聴訴官は、1529年初頭ミチョアカンへ使者を送り、タンガソアンと叔父のドン・ペドロをメキシコ市へ召喚した。カソンシは献上品を携えてヌニョ・デ・グスマンに拝謁した。ヌニョ・デ・グスマンはそれに飽き足らず、1枚0.5マルク (=115g) の金箔800枚と1枚1マルク (=230g) の銀箔1,000枚を要求した。[ibid., p.200] そのために、タンガソアンを2か月以上にわたって自宅に軟禁した。ミチョアカンでは銀製の皿・楯・冠・腕輪、金製の楯・皿の244品が集められ、要求に従って成型された献上品が運ばれた。さらに同年8月20日付のヌニョ・デ・グスマンの書簡から、12月に彼がハリスコ遠征に出陣する4か月前に、タンガソアンはふたたびメキシコ市へ呼び出されて、金銀の供出を求められたことがわかっている。2回目の献上品の内容は1回目の献上品とほぼ同一であったが、その品数において1回目の約3倍にのぼっていた。ヌニョ・デ・グスマンはタンガソアンから身代金として金と宝石に加えて、銀5,000マルク (=1.15<sup>ト</sup>) 以上を供出させた。[Zavala(1984), p.64]

掠奪はコルテスやヌニョ・デ・グスマンに止まらなかった。コルテスとともにメキシコに来たガルシア・デル・ピラルはアステカの言語ナワトル語を習得し、コルテスの通訳として活躍した。その立場を悪用して、先住民を虐待し、掠奪した。ヌニョ・デ・グスマンの通訳として

活躍したアントニオ・デ・ゴドイは、メキシコ司教スマラガの評によれば、だだの運搬業者にすぎなかったが、ヌニョ・デ・グスマンに裁判権を付与されてミチョアカンへ派遣された。その際、ヌニョ・デ・グスマンと彼の仲間である聴訴官に委託された食料や日用品をミチョアカンへ運び、そこで金の採掘に明け暮れる鉱山主たちに売っていたのである。〔Warren, p.197〕ゴドイは、タラスコ王国の都ツインツァンをはじめとする要衝地で、死者の墓を暴いて副葬品を奪った。その額は、金貨5,000ペソ (16.9kg) にのぼった。〔Zavala(1984), p.64〕

このように、征服初期におけるタラスコとスペインの経済的価値観は対照的だった。タラスコが献上した品々は、王室の財宝だった。征服者は、およそ金・銀以外の品には目もくれず、掠奪と分配に与ることが彼らの目的だった。征服者の上位権威としてのスペイン王室は、征服者の独断専行を抑えつつ、彼らによる征服の戦利品からキント税を享受していた。タラスコの支配領域内の主要な鉱山は、征服とともに、スペイン人に押さえられた。征服初期における財宝の掠奪が一巡すると、スペイン人はタラスコの貢納と賦役を享受した。

## 2. 多様な貢納品の整理

スペイン支配が始まったからといって、タラスコは先スペイン期の生産形態をすぐさま変えることはなかった。征服と入植における功績に応じて下賜された先住民の貢納受領権エンコミエンダを享受した人々はエンコメンデロと呼ばれ、多様な貢納品をタラスコから受領した。それらの品は先スペイン期の貢納を反映したものと考えられ、その中でも綿布は、代替貨幣として、タラスコだけでなくメキシコの先住民一般にとって、カカオよりも価値のあるものだった。貢納品が多様であることは、入植者の食料供給には好都合だったが、スペイン王室にとって、できるだけ早期にメキシコ全土において、主たる貢納品の交換価値を調査して確定しなければならなかった。そのために、まずは多様な貢納品をスペインの度量衡を用いて把握することから着手された。どのように先住民の貢納の全体像がとらえられ、整理されて、人頭税への統一的制度移行が図られたのだろうか。

タラスコの降伏から1年後の1524年、コルテスはアントニオ・デ・カラバハルを派遣してミチョアカンの主要地を調査させ、自らの権限で配下にエンコミエンダの村を分け与えた。コルテスは、タラスコの都ツインツァンをはじめとする10カ所を自らのエンコミエンダとして押さえた。鉱山開発のために、トゥспан村からミチョアカンの太平洋沿岸部に近いモティン金鉱まで約100kmの距離を、100人の先住民を駆り出して貢納の食料を運ばせた。その金鉱から200km以上離れた彼のエンコミエンダの村からも運ばせていた。当時、コルテスにタラスコ語の通訳として仕えたナワトル語話者ゴンサロ・ファレスが、コルテスの執務監査の証言人として語ったところによれば、コルテスのエンコミエンダだったツインツァンとタマスラは、

その属村とともに、コルテスにトウモロコシ、豆、トウガラシ、その他の貢納品の他に、金銀を納めた。それらのコルテスのエンコミエンダを奪ったヌニョ・デ・グスマンと聴訴官は、両村から20日毎にトウモロコシ400カルガ、豆40カルガ、トウガラシ40カルガ、魚40カルガ、塩20カルガ<sup>[1]</sup>、サンダル400足、綿布400反を受領した。貢納はヌニョ・デ・グスマンが鉱山で使役している奴隷の食料に供された。[ibid., pp.64-64] コルテスからエンコミエンダを分配された他のスペイン人征服者もコルテスのように先住民に鉱山へ食料を搬入させた。

すべての村がエンコミエンダとしてスペイン人征服者や入植者に認められたわけではなく、それ以外の王室管轄下の村は、貢納を王室に納めた。現在のミチョアカン州にコリマ州とハリスコ州の一部を加えた地域では、貢納が整理、縮小されて人頭税への移行が行われる16世紀70年代にいたるまでに、4回の貢納実態調査が実施された。1528年のオルテガの調査（対象35村）、1530年代初頭の租税台帳作成のための調査（対象村数不明）、1548年の巡察の総括（203村）、および1560年の調査（66村）である。貢納の実態調査は、アステカの崩壊から約10年後の1530年代から始まり、70年代の人頭税への移行に至るまで、貢納者数についても内容についても厳密ではなかった。ミチョアカンにおけるオルテガの調査は、コルテスのエンコミエンダの貢納と使途目的が明示しているように、鉱山開発のための食料と荷役夫の調査が主だった。次の租税台帳作成のための調査は、徴税官が調査を実施したのではなく、先住民の申告に依拠した調査であり、すべての村が含まれているわけではない。巡察の総括は、調査官により調査の精度が異なり、度量衡にも統一性が見られないなどの欠点を伴う。いずれの調査にも欠落がある。そのことを前提としても、4回の調査から王室管轄下の村落とエンコミエンダの村落のおよその割合を知るには、あまり問題がない。調査から情報が得られた263村の内訳は、王室管轄117村（44.5%）、エンコミエンダ112村（42.6%）、エンコミエンダから王室管轄に移管10村（3.8%）、王室管轄からエンコミエンダに移管1村（0.4%）、王室管轄とエンコミエンダの混在村16村（6%）、不明7村（2.7%）である。[Rojas(1990), pp.6-7] 王室管轄村が48.3%に対し、エンコミエンダ43%とほぼ拮抗していた。貢納の内容については、1548年の調査は調査対象村が多く、トウモロコシ、豆、地鶏、トウガラシ、塩、蜜、魚、カカオの食料のほか、綿布、石灰、容器など、貢納品が多様であったことを明らかにしている。各村が1品に特化しているというよりも、食料、特産物、原材料、加工品を含めて2、3種類の産品を納めていた。最も多くの村が納めていたのは、トウモロコシ（119村、59%）、物納の代替としての賦役（80村、39%）、豆（38村、19%）、スペイン産の鶏（38村、19%）、銀（11村、5%）、銅（2村、1%）、地鶏（25村、12%）だった。この時期になると、スペイン産の鶏（38村、19%）や小麦（17村、8%）、ブドウ（3村、1.5%）、桑（2村、1%）のような産品を貢納の一部として納めている村も出現していた。その他、重要な貢納品として多様な幅と長さ、素材、用途の布地が納められていたが、記録の表記が統一されていないために、違いと価値を同定することがむずかしい。しか

し、先スペイン期から代替貨幣としても使用され、先住民にとって、広幅の綿布一反は、小幅の綿布二反よりも価値が高く、貨幣として同じように使われたカカオより価値があった。[ibid., pp.7-10] そのため、後にミチョアカン司教となったバスコ・デ・キログは、トラスカラの先住民に修道院・教会の建設費用として布地で代価を支払った。<sup>[2]</sup> [ibid., p.14]

スペインの度量衡を様々な貢納品に適用し、統一的な視野で先住民の貢納を把握することで、金納化への移行が図られた。上記の貢納調査が繰り返し行われながら、1570年代末から80年代初頭にかけて、ミチョアカンでは各地の地形、気候、村の人口、村落間の距離、農産物、加工品、資源のあらゆる項目にわたって詳細な調査が実施された。その時期にまでに、メキシコ北部のサカテカス（1546年）やグアナフアト（1548年）の主要な銀山が発見され、開発が始まっていた。メキシコ市と北部鉱山地帯を結ぶ王道や主要地を結ぶ街道が建設され、人の往来が盛んになると、旅人に対する宿泊・食料の提供が、街道に面した村々に求められた。1568年9月30日、地方官ファン・パウティスタ・アバダニョはシピアホ村の村役に、旅人に提供する主要な食料の売価を通達している。<sup>[3]</sup> [Martínez y Espinoza, p.95] スペイン支配の開始から約半世紀が経過して、主な食料品の物価が定まりつつあったことを示している。

スペイン人の進出はメキシコの各地域により異なっていた。1570年頃におけるミチョアカンへのスペイン人の進出は、1543年建設のスペイン人都市であり司教座都市でもあったバリャドリ40人に対し、メキシコ市8,000人、プエブラ800人、オアハカのアンテケラ350人、ベラクルス300人、ユカタンのメリダ150人、グアダハラハラ80人だった。<sup>[4]</sup> [Florescano, p.62] メキシコ市は他の都市と比較して人口が多く、それにとまって需要も多く売買が盛んに行われた。そのため先住民の金納化も進みやすい環境にあったと考えられる。しかし、ミチョアカンのスペイン人都市の人口規模は、メキシコ市の0.5%にすぎず、市場規模そのものが絶対的に小さかったのである。

### 3. 人頭税の導入と金納化

貢納から人頭税への移行過程において、18歳から50歳の妻帯者一人につき1ペソと0.5ファネガ（27.75ℓ）の租税形態へと収斂されていった。タラスコの征服から10年経過した頃から、先住民の申告やエンコメンデロの申告、地方官の説明、先住民とエンコメンデロの合意などの情報をもとに、スペインは先住民の貢納と人口の調査を開始した。しかし、上位権力が貢納の内容を一方向的に決定できたわけではなく、先住民とエンコメンデロの合意が重視され、副王でさえ、両者の合意を追認せざるを得なかった。1543年、ウルアパンでは、先住民とエンコメンデロが貢納について合意に達することができないために、地方官の仲介が求められている。同年、ウアカナでは、副王の依頼により地方官の立会いのもと、先住民とエンコメンデロは、貢



納の一部を別の産品に代替する案に合意している。一方、1548年、タイムオの代表は、エンコメンドロとの合意にもとづいて従来の貢納の継続を願い出ると、副王メンドサはタイムオの要望を追認している。〔Miranda, pp.285-287〕王室管轄下の村でも、先スペイン期の貢納が調査され、需要に応じて搬入先が指定されていた。1538年、アラロでは、鉱山での賦役と年間1,000ファネガのトウモロコシの他に、30日毎にトウガラシ5荷（1荷＝2ファネガ）と塩5カルガを銀山に搬入している。1546年、シナペクアロに対し、貢納のトウモロコシはミチョアカンの司教座都市バリャドリへ、トウガラシと塩は、従前どおり鉱山への搬入命令が出されている。〔ibid., p.218〕

1542年11月20日に発布されたインディアス新法により、エンコミエンダは廃止された。植民地のエンコメンドロが廃止に反対して不穏な事態に発展したために、即時撤廃は見送られたが、49年、貢納を賦役で代替することが禁止された。かわって、有償の強制労働徴発制度であるレパルティミエントが導入される。ついで1552年12月付勅令により、それまでのように、貢納に関して先住民とエンコメンドロとの合意を尊重することが禁止された。16世紀半ばになると、巡察と巡察使自らによる人口調査と税の決定プロセスが前面化され、税額決定において人口の重要性が高まった。

金納1ペソには、王室あるいはエンコメンドロに対する租税、教会関係費、および村役の報酬や共同体の維持に充当される共同体費が含まれていた。さらに、1552年8月28日付勅令によりメキシコ市大聖堂の建設費として、後には、1744年までバリャドリの大聖堂建設費に充当された0.5レアル、1591年11月1日付勅令によりすべての先住民に防衛費の名目で4レアル、および1606年4月19日付勅令により先住民法廷費0.5レアルが加算されていった。〔ibid., pp.19-20〕納税期は、先スペイン期には貢納品によって80日毎、半年毎、年1回と多様だったが、人頭税への移行により6月24日とクリスマスに金納し、物納はトウモロコシ収穫後の12月に統一化された。

このような移行が円滑に行われたわけではない。エンコメンドロが金納を認めず、希望の品目を要求し続けることもあった。1564年、ペリバンでは、判官ファン・デ・バエサが村の人口と納税者数を再調査した後で、先住民保護官オルテガ・モランは、ペリバンの村人とともに、エンコメンドロのアントニオ・デ・ルナに対して租税から綿布を外し、他村のように、金納と物納（トウモロコシ）を認めるよう争っていた。それ以前の1557年には、ペリバンは寒村であることを理由に、高等法院に税の軽減措置を願い出ていた。58年にはエンコメンドロのフランシスコ・デ・チャベスも軽減を願い出たが、認められなかった。チャベスに代わる新エンコメンドロのルナは綿布を要求していた。保護官が近隣村の先住民から事情聴取を行うと、ペリバンでは綿花が栽培できないので、綿布を要求されることは過重であろうと彼らが証言したのに対し、その一帯を管轄する地方官やペリバン出身のスペイン語通訳は、村の土地は肥沃で、温

暖地と寒冷地があるため、綿花栽培に適した土地もあると判断した。判官バエサは、ペリバン  
のフランシスコ会修道院長ヒルベルティ修道士からも意見を聴取すると、修道士は先住民の主張  
を暗に支持する回答を行った。最終的に、保護官は判官に対し、親元にいる独身者を人頭税  
の対象から外すよう要請したのである。〔Martínez, pp.75-76〕

#### 4. 先住民タラスコと貨幣経済の乖離

先住民が生産物を市場で販売し、その収入で税の金納化を実現することは、それほどたやすい  
ことではなかった。その理由は先住民社会固有の社会・経済構造にあるというよりも、貴金  
属や商品作物の有無、先住民人口の規模、アクセスの要因がスペイン人の進出を促し、消費の  
増大を生むかどうかにか左右されたからである。その意味において、ミチョアカンでは、植民地  
期のタラスコの中心パツクアロ、北の鉱山地帯とヌエバ・ガリシアへと続く街道沿いの東部地  
域、カカオ生産地域や金鉱に近い太平洋沿岸の一部の地域は、スペイン人が進出する地域だっ  
た。しかし、すでに見たように、16世紀後半において、ミチョアカンのバリャドリにおけるス  
ペイン人居住者数は、メキシコの他の拠点都市の中で、最も少なかった。

他方、タラスコ王家の末裔は、スペイン国王を上位権力と認める限りにおいて、家産と権限  
を縮小されて統治機構の末端に位置付けられた。そしてミチョアカンの先住民に対して、かつ  
ての権威をふるおうとしていた。タラスコ最後のカソンシ（君主）タンガソアンの孫にあたる  
コンスタンティノ・ウィツイメンガリは、1588 - 95年にかけて、彼の地位篡奪を企む王族内の  
反対派から激しく糾弾された。その理由のひとつとして、ミチョアカン全域のトモロコシや  
その他の食料品、および製造品の買取り契約を独占していることが挙げられている。〔Castro  
Gutiérrez, pp.60-61〕 糾弾の真偽のほどは措くとして、先住民支配者が権威を盾に経済的独占  
や搾取を行う余地は十分にあった。物資を安価に入手して販売することによって利益を貪った  
ことが推測される。タラスコが納税に必要な最低限の貨幣をなんとか調達することができたと  
しても、彼らの経済に限界が生じるのは、征服によって先スペイン期社会の支配層の権力が部  
分的に解体されるにとどまったことにも一因がある。ミチョアカンでは、征服から百年を経過  
しても、王族の末裔が権力をふるい続けたが、それにもまして、本国スペインの利益が優先さ  
れたからである。<sup>[5]</sup>

ミチョアカンには、いつ頃、ローカル市場が出現するのか。ミチョアカンがメキシコの他地  
方との生産と流通と消費の関係性において、スペイン人経営の大農園が生起し、域内の産物と  
生産地が確立して小麦や赤砂糖、染料、および道具類がこの地方の特産となり、域内・域外の  
商圏が明確になるには、17世紀末から18世紀初頭まで待たねばならなかった。その時期にな  
ると、ピラミッド構造をなす商業資本が浸透し、その末端に位置付けられた行商人は、ミチョア

カンを巡り、地方の特産物を先住民の村で買い付けるとともに、日用品を販売する商業形態が確立する。副王から商権を認可された先住民の行商人は、一定の地域をラバの背に食品や日用雑貨をのせて売り歩いた。〔Morin, p.160〕 またその頃、グアナフアト銀山の北約67キロメートルに位置する巡礼地サン・フアン・デ・ジャノスでは、毎年12月8日のコンセプションの祭りに大勢の人々が巡礼に訪れ、大市が開かれていた。大市では、ミチョアカンに隣接する地方と北の地方のスペイン人商人が、仕入れたヨーロッパや東洋の品物を2倍の高値で商っていただけでなく、巡礼地周辺地域の先住民も製造品を販売するためにやってくる。〔ibid., pp.153-156〕

ミチョアカンの先住民の貢納が物納されていた時期には、その現金化はエンコメンデロや競売権限を有する高等法院の責任であった。貢納品は競売にかけられ、あるいは販売地を選択することで、最大限の利益が追求された。先に見た1536年のアラロと1546年のシナペクアロの事例が示しているように、近隣の需要よりも高値での売却の可能性が追求されたり、ミチョアカンの行政・宗教の中心都市バリャドリへの食料供給を安定させ都市が発展するよう、トウモロコシの継続的な搬入を義務づけるというように、その時ごとの最大の関心事が優先されていた。人頭税の導入後、ミチョアカンの先住民タラスコはどのように金納化に対応したのだろうか。

先スペイン期から先住民は生産した産物を売り、必要な物資を調達するために、地域の中心村で定期的に開かれていた先住民の市ティアングスを利用していた。彼らの伝統的な商習慣だったが、スペイン支配後も引き続きミチョアカンの主要地で開催され、村々から食料、毛布、綿布、特産品、製造品などが持ち込まれて、売買されていた。非先住民人口が増えるにつれ、様々な人々がティアングスを利用していたことは、史料の断片から窺い知ることができる。しかし、どのような経済規模に達していたのかは不明である。スペインが、財政再建のために、ティアングスの売り買いに課税するために着目するのは、18世紀後半である。しかし、その計画は実行されなかった。このように、先住民が直接、貨幣を獲得する方法には、ティアングスの他に、街道の宿場での食料・その他の物品の販売や雑役、あるいは、荷物の運搬、旅人への馬と馬具の貸出し、飼料の販売、家事労働、家屋や教会の普請作業、鉱山労働、農園での農作業や家畜の世話などがあった。こうした小商いや雇用が先住民の間で行われれば、カカオで決済することが定められていた。

アステカでは、高品質のカカオは貴族の飲み物として、低品質のカカオは代替貨幣として使用されていた。タラスコにとっても、カカオは貴重な飲み物だった。王が亡くなると、生前、王にカカオの飲み物を供していた女官がともに埋葬された。〔Motolinía, p.117〕 先スペイン期、アステカでは綿布やカカオを代替貨幣として使用していたように、タラスコでも、小綿布、カカオ、タハデラと呼ばれる小斧の型をした銅の小塊が使用されていた。16世紀後半、カカオより高価で種類の多い綿布は、スペイン人には扱いにくいために、主たる代替貨幣の地位

をカカオに譲った。ミチョアカンでも、カカオによる決済が副王によって命じられている。タラスコ最後のカソンシであるタンガソアの次男アントニオ・デ・ウィツィメンガリが所有する砂糖農園はバリャドリから約30キロ離れた場所に位置しており、1579年、アリオの村人は往復2日かかりで、燃料の薪を搬入していた。しかし、薪1カルガにつき、わずかカカオ25粒しか支払われないことに不満を訴えている。〔Zavala y Castelo, p.191〕一方、スペイン人が彼らに購入代金や賃金を支払うときには、銀貨でなければならなかったが、カカオ、もしくは鑄造されていない貴金属で決済されていた。それどころか、16世紀80年代、パツクアロとヒキルパの地方官は、彼らに代金を払うことなく、食料を取り上げ、労働奉仕を強制していた。副王はティアングスでの現金による食料と物品の購入を命じるとともに、無償の労働奉仕を禁じた。〔Martinez y Espinoza, p.349〕先住民はスペイン人とのやり取りの中で、カカオやスペインから持ち込まれた貨幣、純度も一定しない金銀の小片・小塊を受け取っていたと思われる。ともあれ、両者の経済を結ぶには、基準となるスペインの貨幣とカカオの換算率を定めなければならなかった。スペインの銀貨1ペソ（27.5gのうち銀の含有量が25.5g、純度93%）は8リアルからなり、1550年、メキシコ市都市参事会は、1リアルにつきカカオ200粒の換算率を定めていた。17世紀初頭、メキシコを訪れたイギリスのドミニコ会修道士トマス・ゲイジは、1リアルにつき120～130粒であると述べている。<sup>[6]</sup>〔Rojas(1987), p.82〕

先住民は、1549年以後、レパルティミエントによって組織的・強制的に、スペイン人の経済活動における労役を求められた。徴発対象者は18歳から50歳の男性で、賃金は1日1リアルと定められていた。家事労働や鉱山労働でも、作業内容によっては、女性や少年が駆り出されて、賃金も規定どおりではなかった。経済活動の中でも、少人数ですむ農牧畜業や砂糖製造とは対照的に、植民地経済の根幹である鉱業には、意図的に多くの先住民が労役に駆り出された。鉱業は、農牧畜業、繊維業、製造業の発達を促し、経済波及効果が大きい重要な活動だった。鉱山では、先住民は月曜日から土曜日の6日間労役に服し、日曜日には教会に行き、翌週の月曜日の朝には次のグループと交替した。ミチョアカンから遠方のグアナフアト鉱山であれば、徒歩で往復2週間と労役1週間、すなわち3週間、村を留守にすることになった。先住民には、賃金の他に往復の旅費が支給された。賃金は現金支給が原則だったが、鉱山主は大商人から貸付けられた商品を賃金の一部に充当するか、あるいは商品を賃金として押し付けていた。そのために、1598年、グアナフアトの銀山で労役に服していたセビーナ、アランツァ、コマンハの村人から、支払いが先延ばしされた挙句、衣類を賃金がわりに渡されて困っているとの苦情が出されていた。〔Zavala(1990), p.206〕スペインの商習慣を考慮すると、先住民が正規の貨幣で賃金を受け取っていたとは考えられない。<sup>[7]</sup>

ミチョアカンでは、域内東部にトラルプハウア銀山を抱えていた。1580年、5つの鉱床では、20人のスペイン人のもと、奴隷が50人、労役の先住民200人が働いていた。〔Florescano, p.70〕

1590年には、ミチョアカンのタヒマロとウカレオは、それぞれ45人と49人を送り込んでいた。加えて、96年にはアカンバロから50人が行っていた。〔Castro Gutiérrez, p.230〕他方、メキシコの銀生産量において、サカテカス銀山とならぶグアナファト銀山は、18世紀になると、世界の銀生産量の%を産出する大銀山へと発展を遂げる。開発初期から、ミチョアカンの先住民が労役に送り込まれていた。その先住民の送り込みに関して、グアナファト銀山は、トラルプハウア銀山よりも人数が多く、時間の推移にともなう人頭税の対象者に占める割合を知ることができる。

前掲のミチョアカンの地図中、点線で囲まれた地域は、グアナファトへのレパルティミエントの対象域であった。この地域は高原地帯で、火山を擁し、森林・水資源に恵まれた温暖な地域でもあり、先スペイン期のタラスコ王国の中心領域だった。1579年には500人近い先住民が広範囲の地域から集められ、グアナファトへ送り込まれていた。1657年になると、当初の約10%にまで減少する。(表1) この減少の背景には、先住民人口の減少とそれに起因する村落の再編成による社会的混乱、銀生産の減少が考えられる。ミチョアカンにおける先住民人口の減少は著しい。1580年に至るまでに、ミチョアカンの高原地帯では77%が、それ以外の低地では86.5%が失われた。〔ibid., pp.51-52〕征服による虐待と酷使、天然痘に続くチフス、その他の疫病など様々な要因が影響した。先住民の存在そのものが危機的状態に陥っていた。レパルティミエントの免除願いは、疫病で3、4か月、村の教会建設・修復では、状況次第で数年認められることもあったが、再建であれば百年に一度程度だった。〔ibid., pp.224-225〕先住民は、グアナファトをはじめ、鉱山への労役そのものを様々な口実で回避しようとした。

ミチョアカン12村<sup>(8)</sup>の事例から、労役徴発者のなかで、グアナファトへ送られた人数とその割合を知ることができる。(表2) 12村の人頭税対象者数9,958人のうち、325人(約3.3%)が労役徴発され、さらにグアナファトへは188人(約2%)が送られた。12村から徴発された先住民の半数がグアナファト一カ所に集中配分されていたことは、この鉱山の重要性を物語る。これら12村がすべてグアナファトへ人を送り込んでいたのではなく、ミチョアカンの東部に送り込みの4村が集中し、ウルアパンが最も遠い西部に位置していた。ウルアパンは、グアナファトまで直線距離にして約233kmあった。これらの村はグアナファトへ人頭税者数に対し平均3.88%を送っていた。この数値に対し、グアナファト以外の場所へ送り込んでいる当該人数の割合は、ペリバン<sup>(9)</sup>の17.8%を除いて、平均3.05%だった。レパルティミエントを通じて送り込むことができる割合は、人頭税を納める成人男性人口の最高4%と定められていた。これらの数値は、人口が減少局面に入っていることを考慮すると、厳しいものだったことを示唆している。16世紀末になると、影響力をもつ一部の有力者を例外として、農牧畜業へのレパルティミエントは禁止されたが、鉱業に対しては継続された。〔ibid., p.229〕17世紀に入ると、ますます悪化の一途をたどった。強制ではあったが、賃金労働としてもっとも確実だと思われたグアナ

ファトにおける鉱山労働でさえ、16世紀末には1579年の約39%に、17世紀半ばには約10%にまで落ち込んだ。

グアナファトへの先住民送り込み数（表1）

年	労働者数
1579	487
1589	260
1595	188
1620	132
1628	150
1657	46

（出典：Castro Gutiérrez, p.236）

ミチョアカン12村の徴発総数とグアナファトへの徴発人数（1595年）（表2）

徴発対象村の徴発対象数	9,958 人（12 村）
徴発総数	325 人（約 3.3%）
グアナファトへの徴発人数	188 人（約 2%）
その他の徴発人数	137 人（約 1.3%）

（出典：Castro Gutiérrez, p.235をもとに筆者作成）

スペインは、ミチョアカンの先住民労働力を優先的に鉱業経済圏へ誘導したが、人口が激減したために、開発は制約を受けざるを得なかった。そのために、他の経済分野へのレパルティミエントは廃止されたが、鉱業分野は例外として残された。スペインによる人頭税の金納化政策の目的は、先住民を貨幣経済に統合して植民地経済の一体化を図るというよりも、金納化を媒介に、とりわけ鉱業分野が必要とする先住民の労働力をできる限り提供することであった。では、なぜ人頭税にはトウモロコシによる物納が含まれていたのか。その理由は、先住民を基本的に農業生産者にとどめて、都市住民のための食糧供給を安定化させることであった。インディアス法集成によれば、フェリペ2世（在位1556 - 1598年）は、「メキシコの幾つかの所では、金納化が原因で先住民が耕作を疎かにしているために、物価が上昇している。よって、金納を物納に代替させよ」と命じている。この命令が先住民の利益になり、公共の大義に資するものであるとも述べている。〔*Recopilación*, Libro VI, Título V, *Ley xxxviii*] メキシコ市の周辺地域では、いち早く先住民の金納化が実現されたが、メキシコ市に食糧供給が不安定な事態を招いた。そのために、1556年2月26日の勅令により、全面的な金納化が撤回され、貢納の一部を

物納に回帰させる措置がとられた。〔Miranda, p.208〕フェリペ2世の命を受けた措置であったことは明白である。17世紀に入り先住民の危機的状態が顕著になると、金納化が特別な許可を要する事項になっていた。1612年、フェリペ3世（在位1598 - 1621年）は、先住民が正当な理由により、一定期間金納化を願う場合には、適切な措置をとるよう命じている。〔*Recopilación, Libro VI, Título V, Ley xxxx*〕しかし一方で、鉱業分野へのレパルティミエントは継続された。これらのことから、人頭税の金納化とは、鉱業分野に代表されるスペイン人の経済活動に対するレパルティミエントと都市への食糧供給のふたつを、絶妙なバランスでともに維持するための手段であったことは明らかである。

## おわりに

征服によりタラスコ社会の莫大な財宝は征服者とスペインに奪われ、タラスコの貧困化が始まった。征服の終焉とともに、征服者はエンコメンデロに変貌し、王室とともに、多様な貢納を受領した。統治体制が整うにつれ、先住民の貢納品にスペインの度量衡が適用された。均一的な計量化と貨幣による評価額が規定された。それと並行して、メキシコ中央部における先住民の生産物のおよその交換価値が理解され、それにもとづいて基本価格が定められてその普及が図られた。しかし、それはスペイン人の移動、経済活動、先住民からの物資の調達を円滑にするためであった。先住民によるカカオ経済は300年間続いたが、それは、スペインが少額貨幣の鋳造を行って事態を改善する意思を放棄した一方で、スペインのセビリアを本拠とする大商業資本が流通貨幣を独占する経済構造が構築されたからである。国庫の支出だけを見ても、平均56.8%がスペインとフィリピンに送金されていたのである。個人の送金分を加えれば、この数値は膨れ上がるだろう。

人頭税金納化の狙いは、先住民をスペイン人の経済活動の中で最も利益の上がる鉱業分野へ誘導することだった。その結果として、貨幣経済が彼らの間に緩やかに浸透したと考えられる。しかし、17世紀前半に至るミチョアカンにおいて、スペイン人の進出とタラスコ社会の変容スピード、カカオ経済、壊滅的人口減少とグアナフアトへの労役人数の激減、タラスコの鉱山労役に対する忌避傾向、および、食糧供給の不安定化に対するスペインの懸念を考慮すると、実態はほど遠いものであった。たとえ些細な経済活動で多少の貨幣を得たとしても、用途は人頭税だけではなく、宗教的な義務も彼らに課されていた。ミチョアカンの多くの村は、税の滞納に悩まされ続け、金納するためにスペイン人に負債を負っている事例もある。

カカオと銀貨ペソとの交換比率が定められていたが、どのように先住民がカカオを換金していたのかについて解明する研究は、今のところない。カカオでさえ、どのように循環させて使用していたのかについても不明である。スペイン人の貨幣経済においてさえ、流通貨幣の恒常

的不足が語られている。スペイン人の貨幣経済と先住民のカカオ経済は政策的に連携されていたが、現実には乖離していた。この状況を植民地経済の二重構造と呼ぶことができる。こうした状況下における税の金納化とは、メキシコ全土の先住民の税を統一的に掌握するとともに、スペインを最も潤す鉱業に大量の労働力を提供する手段として利用された。ミチョアカンの事例から、征服から17世紀前半に至る時期において、スペイン重商主義の意図するところは、物価を安定させるために先住民に農業生産を続けさせながら、金納化と連動したレパルティミエントを媒介に、鉱業開発を支えて税収の増加を図ることだった。そこから得られたメキシコ銀は、スペインとフィリピンを経由してヨーロッパと東洋に流出し、世界経済を潤した。先住民に課せられた人頭税は、スペイン重商主義の発展を促進するメカニズムを孕んでいた。ミチョアカンでは、先住民タラスコが壊滅的状況に陥って、その目的の遂行は、暫時、停滞せざるを得なかったにすぎない。

## 注

- [1] カルガはスペインの重量単位で、約160-180kgに相当する。ヌニョ・デ・グスマンが要求したのは、トウモロコシ64<sup>ト</sup>、豆6.4<sup>ト</sup>、トウガラシ6.4<sup>ト</sup>、魚6.4<sup>ト</sup>、塩3.2<sup>ト</sup>の大量の食料だった。
- [2] 「1532年、バスコ・デ・キロガが、メキシコ市で働いた先住民の賃金をクエルナバカの綿布で支払った」という Rojas の引用は、Zavala (1984) の史料集から援用されたとの記載が Rojas 論文 (1990) にある。史料集の指定頁を参照しても、バスコ・デ・キロガに関する記述は見当たらない。出所記載の誤りであろうと思われる。クエルナバカの綿布、および衣類に関しては、先住民にとって価値があっただけではなく、1530年代においてはスペイン人商人にとっても商品価値のある貢納品のひとつだったことが、同じ史料集に所収されている史料から窺える。〔Zavala(1984), pp.115-119〕
- [3] シピアホ村は18世紀後半まで存続していたが、現存していない。当時、この村があったクイツェオ湖地区は、北部に位置するグアナファト銀山やメキシコ北西部の拠点グアダハラに至る街道のひとつだったと考えられる。その距離は、直線距離にしてグアナファトまで約162km、グアダハラまで約275kmである。史料では次のような売価が通達されていた。トウモロコシ1ファネガ (=55.5 $\ell$ ) 6トミン、パン5個 (総重量1リブラ=500g) 1トミン、タマル25個 1トミン、カスティリヤ産鶏1羽 銀貨0.5リアル、地鶏1羽 2トミン、卵20個 1トミン、薬草2カルガ 1トミン
- [4] スペイン人のほかに、黒人奴隷、および黒人系混血ムラートが居住していた。例えば、メキシコ市の黒人奴隷8,000人、ムラート1,000人に対し、バリャドリの黒人奴隷は50人だった。
- [5] Semoは、王国国庫 (1576-1650年) の支出に占めるスペインとフィリピンへの送金額のデーターを挙げている。〔Semo, pp.233-235〕 そのデーターから1年の支出額とスペインとフィリピンへの送金額の3つの数値がそろっている年に限定すると、9年分のデーターとなる。筆者がそれを整理し、次の結果が得られた。支出に占めるスペインとフィリピンへの送金合計で最高の割合は、83.5% (1613-



1614年)、スペインへの送金の最高は77.4% (1613-14年)、最低は23.3% (1626-27年)、フィリピンの最高は21.7% (1623-24年)、最低は1.7% (1637-38年) だった。スペインとフィリピンへの送金額合計の平均は56.8%、スペイン42.9%、フィリピン9.79%であった。

- [6] モトリニアによれば、征服直後のメキシコ中央部における荷役夫の日給が1日カカオ100粒だった。1545年のトラスカラの記録では、同地のティアングスで売られていた品物の値段がわかっている。例えば、よく肥えた雌の七面鳥1羽 (100粒)、野兎 (100粒)、七面鳥の卵1個 (3粒)、摘みたてのアボカド1個 (3粒)、大きなトマト1個 (1粒)、大きなサポーテの果実 [チューインガムの木の実] (1粒) タマル [トウモロコシ粉で作られた蒸し物] (1粒) [Coe, pp.137-138] 先住民の労役の1日の賃金は、0.5リアル~1リアルと定められていた。1580年、ミチョアカン北東部と隣接する地方の中心都市ケレタロでは、農作業は食事つきでカカオ25粒が支払われていた。[Zavala(1980), p.317]
- [7] 鉱山の開発資金に事欠く鉱山主は、スペインのセビリアの大商人から融資を受けていた。銀の延べ棒や銀塊、および商品を貸付けられていた。スペインの商習慣として、利子の授受は禁止されていたので、利子が組み込まれた多様な貸付ルールが考案された。現金貸付の場合、40日以内に利子を上乘せした額・量の銀で返済された。利子は年率にすると114%に達した。返済された銀の純度は貸付られた銀よりも高いのが一般的だったが、このことは返済において考慮されなかった。大商人は、鑄造費用を節約するために、メキシコで唯一の貨幣鑄造局のあるメキシコ市において、ふたたび融資を実行した。融資から2か月後には、利子を含んだ額の鑄造銀貨を受け取ることができた。鉱山主に対して、銀だけでなく商品も信用で売られた。鉱山は不便な遠隔地にあったので、スペインからの輸入品であれ、メキシコ産の商品であれ、高値で売ることができた。[Martínez, pp.61-62]
- [8] 12村は次のようなものだった。Chucándiro, Guango Puruándiro, Conguripo, Zacapu, Comanja(Cueneo), Sevina y Nahuatzen, Pátzcuaro, Uruapan, Tarecuato, Chucándiro y Tacáscuaro, Peribán [Castro Gutiérrez, p.235] 太字の村がグアナフアトに村人を送っていた。

## 参考文献

- Castro Gutiérrez, Felipe (2004), *Los tarascos y el imperio español, 1600-1740*, México, UNAM/UMSNH.
- Florescano, Enrique y otros (1980), *La clase obrera en la historia de México: De la colonia al imperio*, vol.1, México, UNAM.
- González Gutiérrez, Pilar (1995), *Creación de la primera casa de moneda en Nueva España: Producto acuñado*, Alcará de Henares, Univ. de Alcará de Henares.
- Martínez Baracs, Rodrigo y Espinoza Morales, Lydia (1999), *La vida michoacana en el siglo XVI: Catálogo de los documentos del siglo XVI del Archivo Histórico de la Ciudad de Pátzcuaro*, México, INAH.
- Martínez López Cano, María Del Pilar (2001), *La génesis del crédito colonial: Ciudad de México, siglo*

- XVI, México, UNAM.
- Miranda, José (1952), *El tributo indígena en la Nueva España durante el siglo XVI*, México, El Colegio de México.
- Morin, Claude (1979), *Michoacán en la Nueva España del siglo XVIII: Crecimiento y desigualdad de una economía colonial*, México, FCE.
- Motolinía, fr. Toribio (1970), estudio preliminar por Fidel de Lejarza, *Memoriales e historia de los Indios de la Nueva España*, Biblioteca de Autores Españoles; t.240, Madrid, Real Academia Española.
- Recopilación De Leyes De Los Reynos De Las Indias* (1998), Tomo II, Madrid, Centro de Estudios Políticos Constitucionales: Boletín oficial del Estado.
- Rojas, José Luis de (1987), “La moneda indígena en México”, *Revista Española de Antropología Americana*, núm.XVII, Madrid, Ed. Universidad Complutense, pp.75-88.
- Rojas, José Luis de (1990), “Consideraciones sobre el tributo en Michoacán en el siglo XVI”, *Relaciones* 42, vol.XI, Zamora, El Colegio de Michoacán, pp.5-21.
- Sánchez Díaz, Gerardo (2001), *La Costa de Michoacán: Economía y Sociedad en el siglo XVI*, Morelia, UMSNH/INAH/Morevallado Editores.
- Semo, Enrique (1973), *Historia del capitalismo en México: Los orígenes, 1521-1763*, México, Ediciones Era.
- Zavala, Silvio y Castelo, María (1980), *Fuentes para la Historia del Trabajo en la Nueva España, 1579-1581*, Tomo II, México, CEHSMO.
- Zavala, Silvio (1984), *Tributos y servicios personales de indios para Hernán Cortés y su Familia (Extractos de documentos del siglo XVI)*, México, Archivo General de la Nación.
- Zavala, Silvio (1990), *El servicio personal de los indios de la Nueva España, 1600-1635*, TomoV, Primera Parte, México, El Colegio de México/El Colegio Nacional.
- Warren, J. Benedict (1977), traducido por Augustín García Alcaraz, *La Conquista de Michoacán 1521-1530*, Morelia, Fimax Publicistas.
- ソフィー・D・コウ、マイケル・D・コウ (1999)、樋口幸子訳『チョコレート歴史』河出書房新社

(はやし・みちよ 外国語学部教授)